

角川財団法人芸賞選考委員会より

## 人文学の低迷に警鐘を鳴らす

山折哲雄

南方熊楠は紀州、酒造家の生まれ。漱石や子規と同世代、東京大学への入学直前に海外に飛び出す。形だけ留学の形をとりながら、米国、キューバを放浪、目にする動植物の世界に心を躍らせ、新種・珍種の発見に我を忘れる。少年時代、すでに和漢の本草学や博物学にとっぷりつき、伝統知の蓄積が五臓六腑にしみこんでいたからだだった。

その知的興奮と快感が英京ロンドンで全面開花。大英博物館で類を絶する文献漁り、膨大な抜書メモを作成し、同時に西欧近代知をむさぼるように吸収摂取する。海外の専門家たちと果敢な論争、交流を重ねて学術誌「ネイチャー」などに発表、帰国する。しかし中央の権威や大学には目もくれず、ふるさとの熊野に隠棲、高野山の土宜法龍に大乘仏教を学んで、独立独歩の学問世界を開拓して、世に知られる「南方マンダラ」の構想にたどりついた。

本書の著者は熊楠の人間と足跡を徹底的に追ひ、この思想的巨人における西欧的な分析知と東洋的な伝統知の稀有な総合の解明につとめ、かつそのことにみごとに成功している。これまで現代日本を代表する知識人たちが無視し傍観するのみだった問題群を掘りおこし、それを批判的に展開することに没頭してたじろがず、終始、沈着冷静なメスさばきを手放すことがない。二〇年以上にわたる調査研究をうまわずたゆまずつづけて、南方熊楠の学問と人間をこの世に再登場させたことに敬意を表したい。

今日、近代知の限界を説く声は、さすがにこの国においても増加のきざしをみせている。しかしそのことを学問の水準で理論的に追求し、人間のレベルにおいて実践する者の数は寥寥たるものだ。あい変らず外部から導入する西欧知にべったりの学習・模倣のくり返しがはびこって久しい。今日、地球は地震などの自然災害が頻発し、くり返される経済予測はすべて失敗、民族・宗教がらみの国際的な紛争に右往左往している。原発問題に音をあけ、地球環境の改善は声のみ高く、解決にはほど遠い。このようなとき、このたびの松居氏の仕事は今なお低迷をつづける人文学に警鐘を鳴らして鮮やか光彩を放つ。そのことを心から喜び、氏の労苦をたたえたい。